

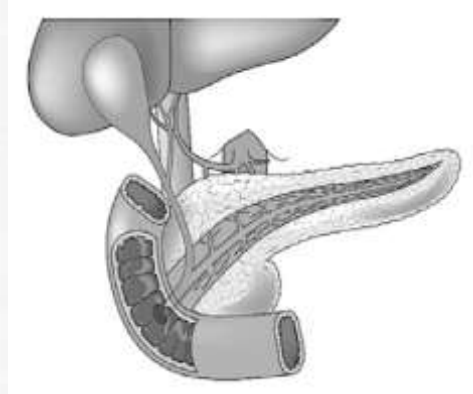
7月より肝胆膵外科の専門外来を開設

肝・胆・膵とは、「肝臓」、「胆道」、「膵臓」の3つのことです。

「肝臓」はお腹の右上にあり、動脈、静脈、門脈の血管からできていて、胆汁という黄色い消化液をつくります。この胆汁は「胆管」を通過して十二指腸に分泌され、食物の消化を行います。この胆汁を蓄えておくのが「胆のう」です。「膵臓」は体の真ん中で胃の裏（背中）側にある臓器で、インスリンなどのホルモンや消化液である膵液を分泌します。

肝胆膵の良性の病気で最も多い「胆石」は、胆管や胆のうに石ができる病気で、症状のないことも多いですが、炎症が起こるとお腹の右上の肋骨の下あたりに激しい痛みが起きます。症状がある場合は、手術をお勧めします。また、肝臓の炎症は肝炎、膵臓の炎症は膵炎という病気があります。肝炎はウイルスやアルコールなどが原因で起こり、進行すると肝硬変から肝臓がんになるので定期検診が必要です。膵炎はアルコールや胆石が原因で起こり、激しい腹痛や背部痛を引き起こします。重症化して死に至ることもあるので、すぐに病院で治療する必要があります。

肝胆膵の悪性の病気は、「肝臓がん」、
「胆のうがん」、「胆管がん」、「膵臓がん」があります。胆管がんや膵臓の頭部（胆管の近く）にできた膵臓がんでは、胆汁の流れが悪くなった場合、皮膚や眼球が黄色くなる「黄疸」の症状が出ます。一方、肝臓や膵臓は「沈黙の臓器」と言われるように、初期段階で症状がでにくいので、



知らず知らずのうちに進行していることが少なくありません。少し体がだるい、消化が悪い、胃のあたりがなんとなく不快、少し鈍い痛みがあるなど、ちいさな異変を見過ごさずに、些細な症状でも病院へ行って血液検査や超音波検査などを受けることをお勧めします。それが早期発見、早期治療に結びつきます。

当院では、毎週火曜日午前に肝胆膵外科の専門外来を開設しています。また、安全かつ有効な医療を提供するために外科的治療だけでなく、消化器内科や放射線治療センターなど関連各科各部門との協力のもと病院総力をあげて、化学療法や放射線療法などを含めた集学的治療にも積極的に取り組んでいます。

外科部長 山田高嗣